

イギリスの田舎牧師の生活（63・2・20）

白田 昭（昭和24文丙）

本日はジェームズ・ウッドフォードという牧師の話をいたします。一七四〇年に生まれまして、一八〇三年まで、およそ十八世紀の後半を生きた牧師なのでありますが、それが四十年にわたって日記を書き続けておりました。その日記が活字になって出版されておしまして、それをたまたま目にする機会があったわけですが、この日記に基づいて、十八世紀の末のイギリスの牧師の生活がどういふものであったかというようなことをお話申し上げようかと思っております。

今も申しましたように、ジェームズ・ウッドフォードという人は、一七四〇年、十八世紀の半ば、イギリスの南西部サマセットシャー州のある村で、やはり牧師の息子として生まれました。そして一七五二年にウィンチェスター校という有名な伝統的パブリック・スクールへ入りました。これは大昔、十世紀か十一世紀頃にウィンチェスターの司教がこの地方の子供の教育のために建てた学校であります。学校を作りましたからには、次の段階へ進む道を作っておかなければなら

ないわけで、南西部でありますので、大学へ行くにはケンブリッジよりは、オクスフォードが近いわけです。その司教はウィンチェスターで学んだ教え子達にさらにオクスフォードで勉強する時の便利のために寮を作りました。中世のころ、各地からオクスフォードへ集まってきた学生たちが、昼間大学で有名な神学者の講義を聞いたあと、夜勉強し寝泊りするのための寮というのが、いわゆる現在のカレッジという形で残っているのです。従いましてそのウィンチェスター校の生徒を入れるために作りましたカレッジが、ニュー・カレッジであります。ウィンチェスター校の生徒の大半は、卒業すると、ニュー・カレッジへ行つて、オクスフォード大学に入る権利のようなものを持っております。

現在はどうなつておるかわかりませんが、ウィンチェスターからニュー・カレッジというのは、ひとつの決まりきつたルートであります。イートンはケンブリッジのキングズ・カレッジというのを作っております。イートンの生徒はケンブリッジのキングズ・カレッジへ入る、ウィンチェスターの学生はオクスフォードへ行つて、ニュー・カレッジへ入るとというのが決まりのコースであります。

ジェームズ・ウッドフォードもニュー・カレッジへ入りまして、そして大学を卒業し、牧師の資格を得ました。父親の許に帰つて、父親の助任牧師として勤めているうちに、八年程して父親が亡くなりました。父親の後を継いでそのままその教会の牧師になりたかつたんでありますけれ

ども、イギリスの牧師というのは妙なことで、教会が任命権を持っているわけではありません。村の地主の土地を借りて、土地からの上りで生活をしている手前、地主が任命権を持つておるわけで、彼の希望はかないませず、別の男が牧師として着任して参りましたので、このまゝ故郷にとどまっていてもどうにも仕方がないと判断しまして、もう一度オクスフォードのカレッジへ戻りました。

そしてそこでフェロー、つまり研究員ということになって、学生補導係のような仕事をしておりますうちに、カレッジ所有の牧師の職に空きが出来まして、希望者を募りました。これはフェローたちの就職のためにあるもので、希望者が複数の場合には、フェローの間で互選が行なわれて、投票によって後任を決めるという仕組みになっておりました。この牧師職は、ノーフォーク州という、だいぶん北の方の州のウェストン・ロングビルという小さな村にあったのですが、この牧師職にウッドフォードは立候補いたしました。そして、カレッジのフェロー達の投票の過半数を得て、一七七六年に着任、一八〇三年に死ぬ迄、二七年間この牧師を勤めておりました。

こういう経歴のウッドフォードが一七五八年のオクスフォード入学直前から、死亡の二ヶ月前迄、四五年間の生活の記録を日記に残しておりました。

これの原稿は、オクスフォード大学のボドリアン図書館に所蔵されておりますが、それに基いて五巻からなります抄録版が、「田舎牧師の日記」という題で一九二四年に出版されました。こ

れは今も申しましたように、あくまでも抄録版で、我々が目にしうる活字本は、編者の目を経て取捨選択されており、取り入れられなかった部分に、たいへんスキングラスな部分があるといふことも可能性として考えられますが、恐らくそういうことはなかったといつてよいでしょう。実に平々凡々たる田舎の牧師の生活を記録したもので、面白くないから全部は載せなかったといふものだろうと思います。もし、そういうスキングラスな部分があつたといいたしましたら、一九二四年から今までの、六〇年間に、誰かが他の版を出している筈で、それが出ていないところを見ますと、多分そういうスキングラスなところもない、抄録版がほんとに正直なところを表わしているものと考えていいんだらうと思います。

イギリスの国教会と申しますのは、現在の日本でいいますと、いわゆる聖公会というのに当るんでありますが、これは、右にカトリック、左にピューリタンと両側に敵対勢力をかかえて、真ん中、中道を行くということを標榜しておりました。中道を行くと言えど、いいいんでありますけれども、どっちつかずの、靈的熱意というものに乏しい制度、そして既存の勢力を重んじた、あまり改革的でない教会といふふうに考えられる面もあるわけです。とくに十八世紀の英国の国教会は、惰眠をむさぼっていたと歴史的には言われております。そういう惰眠をむさぼっていた国教会の牧師が、ノーフォーク州という遙か片田舎で、終生結婚もせず、独身のま、ひっそり暢気に暮しておりました生活というのは、あながち、興味の無いものでもないように思うわけ

であります。

ウッドフォード氏が着任いたしましたウェストン・ロングビルという村の牧師職は、公称の年収が当時で三百ポンドということになっております。これを現在の金に換算することは不可能で、どういふことになるかわかりませんが、年収三百ポンド、ま、そこそのものだったとはいえるでしょう。この収入はいわゆる十分の一税というものに基いております。その村で土地を借りている者達は、教会の維持のために、その土地の産物の十分の一を牧師様に差し上げる。豚の子が十匹生まれますと、一匹は牧師様に、鶏が百個卵を生めば、十個は教会へというふうに現物で納入するのが本来の姿でありました。でありますが、貨幣制度が発達して行くにつれまして、それでは出す方も受け取る方も不便でありますので、いつしか双方が、然るべきところで、手を打ちまして、現金で払うのが簡単だということになり、これが年貢和解金とか年貢振替金というような名前で呼ばれるようになりました。ウッドフォード氏の場合の十分の一税の収入額というのは、毎年公称の三百ポンドを多少下まわっております。つまり払う方の利益も考えなければいけないので、ギリギリ一杯は取れないわけです。その他に教会所属の畑地がございました。これを牧師様が耕します。耕作して得た作物をお金に替えるというような収入源もありました。それを合わせると総収入が三百ポンドを少し上まわっているようでありました。こういう暮しでありますから、半分はお百姓さんをやって、半分は牧師さんの生活をするということでありました。

このいわゆる十分の一税の納入日は一年に一回やってくるのですが、これは教区の農場経営者にとっては、決して楽しい日ではございませんでした。日頃、日曜日毎に、お説教は聞くけれども、そのほか、あまりご利益にも預った覚えもない牧師さんのために、かなりの金を出さなくてはならないのですから、嫌味の一つも言いなくなるわけです。

同じ十八世紀のイギリスにクーパーという詩人がおりまして、田舎の生活を唄ったのですけれど、その詩の一節に、年貢納入日にお百姓さんがやって来て、牧師さんの出す振舞い酒に酔っぱらって、「和尚さん、あんたの説教もうまいけど、それにしても多少木戸銭が高すぎる。」と嫌味を言って帰るところが出て参ります。牧師の方でもそれがよくわかっておりますので、当日には手厚いもてなしの用意をいたしまして、お互いに不粹なことは言わないでおこうというふうにもちかけます。だいたい年貢の納入は秋の収穫の終わった頃に行なわれるのが自然でありまして、ウッドフォードの場合は毎年十一月の末から十二月の始めの一日が選ばれておるようであります。

数日前、牧師のところからそれぞれの農場主の家へ下男を使いに出しまして、「何日に年貢を持って来てくれ」という予告をいたします。年貢納入日には夜遅くまで牧師の接待があるということは長年のしきたりでわかっておりますので、農場主の人達はこれを伝えるに來ました下男に、御苦労賃に一杯の酒を振舞います。一度に一杯づつながら、全部をまわりますと相当の量になり

まして、教区を一巡する頃には、この下男はかなりしたたかに酔っぱらうということになります。

日記の中にこういう記事も出てまいります。「今朝、ベン（ベンというのはベンジャミンという下男であります。）を教区一周り、農場主達に次の火曜日が年貢納入日ということを知らせにやった。彼はあちらこちらで、すっかり酔ってしまった。馬は逃げ出し勝手に帰って来ていて、彼はピーチマンの小路で寝込んでいた、が、何とか五時頃家に連れて帰った。」召使が泥酔して道端で昏睡状態になっているというのを、現実を目にいたしますと、あまり美しい光景ではない、あるいは醜悪なのかもしれませんが、文章で読みますとなかなか田園的で、ほゝえましく、牧歌的なように思えてくるのは不思議なことであります。

年貢納入日の当日の様子を、牧師はこういうふうに書いています。「本日は年貢納入日、以下の農場主達が各自、年貢和解金を支払い、そのあと、私の家で食事した。」ここで二一名の人名前が列挙してありまして、「今日、客達、少なくともそのほとんどは、朝二時まで私の家を出て行かなかったが、みんなたいへん上機嫌で帰って行った。中にはかなり酔っぱらっていた者もいた。」そして晚餐の献立がずらりと書いてあります。

「牛のランプ、牛の髄骨、羊のモモ肉の煮物……、ビールは薄いのと濃いのが、パンチにワイン、みんな飲み放題であった。その他パンチを作るのにラム酒六本、レモンダースを用意した。その他今日飲んだポートワインを全部合わせると五本」というふうで、かなり飲んでるようであ

ります。そして「彼等は今日のもてなしに、きわめて満足して和氣霽々のうちに帰って行った。本日の年貢受取分、二八六ポンド十八シリング六ペンス」と結んであります。これが一七九五年一月一日の記事であります。

こういうふうには、三百ポンド足らずのお金がウッドフォード牧師の収入の根本をなしております。一七九〇年を例にとってみますと、年間の総収入が三二四ポンド二シリング七ペンスであります。この内、年貢収入が二九七ポンド十シリング六ペンス、残りは教会附属の農地の収穫によるものであります。でありますから、先程も申しましたように、牧師とは言いながら、半ば農場経営者、つまりお百姓であります。だから農作業の記録、記事が、このウッドフォードの日記の中にたびたび出てまいりまして、田園的雰囲気、牧歌的な魅力を加えております。麦の刈り入れを始めたとか、朝飯の後に干し草を運ぶので一日忙しかったとか、若い雌豚が十八匹子を生んだとか、雌牛が雄の子牛を生んだとか、若い鷺鳥が八羽雛をかえしたとか、蜜蜂が分封したとか……そういうふうな記事が次から次へと出てまいります。

とくにたいへん面白いと思ひましたのは、一七七八年四月十五日のことであります。平素の生活はもちろん可能な限り自給自足で行われておりますので、ビール等は自分の家で醸造をしておりました。その日の日記の記事であります。「昨日ビール樽のおりを出したところ、私の家の大きな豚二匹がそれを飲んで、あきれる程酔っぱらってしまい、立ちもできず、ほとんど死んだ

ように、午餐の時から今日迄、一晚中眠っていた。豚がこんなに酔っぱらったのを見たのは生まれて始めてである。耳をそぎ取ってみたけれど、ぜんぜん感じていない様子だった……」

そして翌日の日記には、「私の家の二匹の豚は未だに歩けない。でも昨日よりはよくなっている。裏庭を転げまわっていて、どうしてもしゃんと立てない。午後の二時になって、二匹ともかなり素面になってきた」とあります。浅学ながら、豚の二匹酔いというのは珍しいことだと思えます。こういう麦だとか、干し草だとか、子牛、豚、驚鳥、蜂蜜等を売った代金が、ウッドフォード氏の収入の残りを占めるわけであります。もちろん、その他に結婚とか埋葬、洗礼、そういった牧師本来の仕事の手数料収入もありますが、これはもう実に微々たるものであります。結婚式の司式はふつう五シリングのようであります。埋葬料は半ギニーと書いてあります。これは十シリング六ペンスということになるのでしょうか。同僚の牧師が留守をして、その日曜日の説教と礼拝の代理を引き受けますと、一回につき半ギニーの謝礼が手に入ることが記録でわかります。先も申しましたように、生活は可能な限り自給自足で、現金というのはよほどのことでないと使わなかったようでした。「今日は朝から一日中エール（ビール）醸造に忙しかった。ウェストンに来て醸造は今日が初めてだ。ウォートンのパーマー氏から、モルトとホップを買った。三六ガロン入り一樽だけ醸造した。モルト四ブツシエルにホップ一ポンド半、これでかなり上等のエールが出来ると思う」と書いております。エールだけではなく、時には蜂蜜酒（ミード）を作る

こともあります。これは名のみ聞いておりまして、日本ではなかなか実物にはお目にかかれないんでありますけれど、この酒の製造法などは、このウッドフォードの日記を読んでおきますと、手に取るように分かるのであります。「蜂蜜十四ポンドに四ガロンの水を加え、しよが、それから接骨木の花二にぎりを入れて、一時間以上たいて、浮きかすをよくすくい取る。それから小さな桶に入れて冷やし、ほとんど冷えたところで肉汁用大スプーン一杯分の生イーストを入れ、温かい場所、すなわち、台所に一晚置いておく。そして翌朝に、蜂蜜酒をひっぱり出して、約五ガロン入の樽に入れて酒倉へしまった」という記事があります。六ヶ月程酒倉でねかしたあと、翌年の五月に「今日の午後五ガロン入りの蜂蜜酒の樽を瓶分けした。去年のミクルマスに作ったものだ」とあります。ミクルマスとは十月二十五日で、十月に作り、半年ねかして、五月に出来るということ。蜂蜜を炊いて、イーストを入れて、そのまゝねかしておく、酒になる。それくらい簡単なもののようにあります。

十八世紀はじめのイギリス詩壇を支配するアレクザンダー・ポープという大詩人がおるんですが、これが「人間論」エッセイ・オン・マンという詩を書いておりまして、その中で、人間にはそれぞれ一人ひとり、その人間の個性を形作るというか、その人間の行動すべてを支配するような欲望、つまりルーリング・パッション（主情）というものが、備っている。そして個々の人間はこのパッションに動かされて、特異な行動をするというふうに言っています。余談なが

ら言いますと、このポープというのは、たいへん女性嫌いをてらっておりまして、女性のルーリング・パッションは他人を支配するという欲望になって表われると言っておりますが、それはともかく、現実の生きている人間の動態、つまり生きている姿の中で、その人のルーリング・パッションが何であるかということは、なかなか決めがたいものでありますけれど、その人が四十年程日記を書き続けたとして、その日記というスタティックな、静止した状態でそれを分析して調べてみますと、個人の持つておりますバイヤスと申しますか、ルーリング・パッションというのは、比較的容易に特定出来るのです。そこが他人の日記を読むことの面白さなのだろうと思います。

ウッドフォードの日記の場合、日常生活の最大関心事というのは、収入、お金、つまり自分の収入から足を出さないこと。それから食べ物、物の記録ということ。つまり金銭の収支と毎日の献立というところに、彼はたいへん記録魔的な性格を見せています。先にも申しましたようにウッドフォードの日記というのは、抄本になっております。したがって、全部が全部を読んだ上での、ほんとに正確なことは言えないのでありますが、収入についていいますと、先の例に挙げました一七九〇年に日記が採録されておりますのは、三百六十五日の中の、二百十一日、約三分の二であります。その二百十一日あります中で、金銭の収支の項目が、支出三百九、収入四十七、合計三百五十六、一日平均一・七項目に達します。そのうちの、半クラウン、つまり二シリング六ペ

ンス以下という零細な金額の支出が百六、収入が三十五、合計百四十一の項目が出ておるのであります。こういうことでも、これはかなりにお金のことについて細かい人だったと言えるようであります。現在、われわれでも一年の日記の中に百四十一回、百円以下の収支が書けるかという、それはかなり細かい人でないといけないのでしょうか。

しかし年収三百ポンドの牧師の地位と申しますのは、終身のものであります。どんな天変地異が起ころうと、死ぬまでウッドフォードの手から奪われるものではなく、非常に安定したものであります。ところが他方この三百ポンドというものは、どんなにあがいても、増える可能性は全くありません。でありますから、処世のためには、足を出さぬという用心が何より肝心になってまいります。ウッドフォード氏の金使いの細かさの原因もだいたいその辺りにあるように思います。ちなみにウッドフォード氏の毎年の生活の中の、支出の最大の項目というのは、いっしょに暮して、身辺の世話を見てもらっております姪と、下男を一人連れて、ふる里のサマセットシヤへ帰省旅行をすることでありました。これはおよそ夏の二ヶ月半程を使って行なわれるのであります。およそ八十ポンド程の費用をかけております。でありますから、三百ポンドの年収では、毎年行なうことができませんので、二年に一度ということになっているようです。さらに申しますと、この時の馬車旅行の記録が、ウッドフォード氏の細やかな支出記録癖と相まって、まことに細かく正確であり、十八世紀末に最盛期を迎えたイギリスの馬車旅行の実態を知る上で、

大変貴重な記録になっています。このあとすぐ一八三〇年に汽車が出来、それ以後馬車は急速にすたれて行ったわけです。

それからもうひとつ、ウッドフォードの記録癖の第二のそして最大のものは、食事の献立でありました。この食事の献立記録の片鱗は、先程の年貢納入日の宴会の記録からも窺えるのであります。日記の中でこの種の記録が最初に見られるのは、オクスフォードの学生時代であります。一七六〇年の五月二十日であります。「われわれの宴樂は以下の通り。重さ一ポンドの伊勢エビ一匹、パン半ペンス、チーズ半ペンス、エール半本、ワイン半本、リスボン一本」(リスボンというのは、ポルトガル産の白ワインのことで、リスボン港から積み出される故にリスボンと呼びます。)カレッジの自室で友人を集めてのコンパの記録であります。われわれもよくこういうことはやったものでありますが、たいへんささやかなものであります。これ以後ウッドフォード氏は、何か宴会がある度に、献立を日記の中に記録するようになりました。「一の膳は鰯、オイスターソース添え、ローストビーフ、タンと煮物のチキン、エンドウ、スープ、根菜、二の膳は、七面鳥の煮物、これは賄い方の間違いで、ローストにすべきものであった。シャコひとつがい、しぎ四羽、ひばり数羽のロースト、オレンジのプリン、ミルク酒とゼリー、飲み物はマデイラ酒とポートワイン、果物一皿。」これは先の学生の頃のカレッジの一室でのコンパより大分豪勢で、ニュー・カレッジのフェロー達の宴会のメニューであります。やはり学生とフェローではメニュ

―も格段と違ふようであります。

その後、ウェストン・ロングビルに落ち着きましてから、ウッドフォードは近くの地主や牧師達と語り合ひまして、ローテーション・クラブというものを組織し、何日かごとに、自分の家で順番に他の会員を晩餐に招待し合うという、田舎での社交を始めました。その記録が日記にたびたび出て来るんであります。「晩餐に出したのは、若鳥二羽の煮物とパン、羊の足肉の煮物と薬味添え、バタープディング、あひる二羽のロースト、グリーンピース添え、アーティチョーク少々、タート、ブランマンジュ、食後にアーモンドと干しぶどう、みかんといちご、マラガ産の白ワインとポートワイン」……こういう献立が出てまいります。これは、ウッドフォード自身が自宅で催した宴会であります。お客が三人、主人側二人、計五人の宴会の献立で、量はかなり多いようであります。

これだけ食べるんでありますから、どうしても、後に消化不良という副作用がついて回ったようであります。ウッドフォードは「鮭の頭、ポテト添え、羊の足肉のロースト、干しぶどう入りプディング、グースベリーパイ」という献立のディナーに招かれました。これが十四日のことで、翌十五日の日記を見てみますと、「全く気分がすぐれない、おそらく、昨日鮭を食べすぎ、その後にリンゴ酒を飲んだためだと思う」……と書いてあります。うなぎと梅干しは食い合わせでありますので、鮭とリンゴもあるいは悪いのかも知れません。そしてその次の十六日にも、「昨日一

晚たいそう具合が悪く、今日一日もそうだった。そのため、全く落ち込んだ気分……。終日ほとんど何も食べられなかった」と、書いてあります。そして十七日に、ルーバーブつまり大黃という生薬を飲みまして、何とか調子が直ったというふうに書いてあります。さしずめ、陀羅尼助を飲んだということではないかと思えます。そして次の十八日には、もう次のローテーション・ディナーに出席しておりまして、まことにタフなものだと思えます。

この献立記録癖というものがドンドン発展いたします。一七九〇年十二月二十二日にもローテーション・クラブの晩餐会が開かれたのですが、ウッドフォード氏はいにくの用事があつて出席出来ませんでした。そして姪のナンシーだけが出かけたのですが、翌日姪から、昨日の献立はどうだったと聞いて、その姪の言ったのをそのまゝ記録に残しております。これはよほど好きでないと出来ないことではないでしょうか。さらに記録熱が高まりまして、一七九一年五月一日以後は、特別の宴会だけにとどまらず、自宅での毎日の食事の記録、献立にまで及ぶようになります。そういうわけで、このウッドフォードの日記からは、十八世紀のイギリスの中流階級の家庭料理の実態が手に取るように分かり、かなりの情報を得ることが出来ます。非常に珍妙なものが出てまいります。ちよつと珍しいなと思うものを上げてみますと、子牛の頭、豚の顔、豚の臓物、雄牛の心臓、豚の耳、雄牛のほつぺた、タラの浮き袋……というようなまことに食欲をそそるものの名前が続々と出てまいります、いながらにして、この世の珍味を味わうような気分

なるわけです。

しかし、人間の世の中は常に諸行無常でありまして、かくも、まことに健啖、グルメとグルマンの楽しみを二つながらに恣しいまゝにしておりましたウッドフォードも、一七九七年五月に病氣にかかりまして、脳出血か、脳卒中かその類の病気で、よくわかりませんが寝込んでしまつてからは、ほとんど半病人になりました、教会の面倒も他人に見てもらふようになって、引きこもつた暮しをするようになりました。しかし、そのような状況の中にありましても、いったん身につきました、献立記録癖だけは健在でありまして、発病後一月足らず、やつと回復して、日記の筆が取れるようになりましたとたんに、また献立記録が顔を出します。しかも本人は、「あらゆる種類の食物から食欲がすっかりなくなつてしまつてゐる」と告白するような状況にあるわけです。それでも記録の方は「本日の晚餐はビフテキ、その他」というふうにまことにけなげであります。そしてそのあとに、「はしをふれることも出来なかつた」という結びがついております。盛者必衰、そぞろ哀れを感じます。そしてウッドフォードの日記の最後の行は次のように終つております。「本日の晚餐、ローストビーフ、その他。」一八〇二年十月十七日のことであります。何事につけ、首尾を全うした人間というのは偉大であるといつてよからうと思います。

この牧師の日常の娯楽はいかなるものだったかという事を見てみますと、それはどうも魚釣りとうさぎ狩りとトランプだったようであります。「今朝、七時と八時の間に網を持って魚取りに

川へ行つた。獲物の中の一、番大物はか、ます、だつた。」（かますというのは、日本のかますと同じかどうかよくわからないのですが、たいへん大きな魚のようであります。）「家に持って帰つて計つてみたら、長さ一ヤード、重さ十三ポンドを越えていた。」翌日の晩餐会にこのかますが食卓に出ます。「晩餐に例の大かます、腹の中にプディングを詰めてローストにした。それに鱈、すずき、鯉の煮物、うなぎとかまつかのフライ、羊の首肉のボイル、プディング添え、これを客に出した。客はテーブルの上の大かますの姿にびっくりしていた。」一番大きな皿二枚の上に寝かせねばならず、台所の雨戸の片方に布を敷いて、その上にのつけて出したのだそうです。こんなに立派な魚がテーブルの上に出ているのは、これまでに見たことがない、料理が実にうまく出来ていて、こんなに大きなものだったけれど、一座の人々が皆「どえらくうまい、とても油気がある」と言つていたと書いております。これが夏の娯樂であります。夏の魚取りに相對しますのが、冬のうさぎ狩りであります。「今朝犬を連れて四時間うさぎ追ひに出かけた。野うさぎを一匹、大そう見事な追跡をやつた後、とうとう仕止めた。他にうさぎの姿は見えなかつた。」このうさぎ狩りというのは捕えても、捕えなくてもいいものでありまして、犬に追いかけさせ、馬に乗つてその後を追つていくという、障害物レースのような楽しみが大きかつたのだらうと思います。近所の人が、あそこにうさぎが出たと、この牧師のところへ知らせに行くと、この牧師はいくらかの心付けを払つて、さっそくそのうさぎを追いかけに行つたようです。夏、冬、戸外ではこう

いうふうになっておりまして、四季を通じ夜には室内でトランプをやったようであります。晩餐会の後、ティーパーティーの後、あるいは誰もいなくても、姪を相手に自宅で、クリベッジとか、カドリールだとか、ホイストだとかいうような勝負をやっておりました。そして、多くてせいぜい二、三シリリング、少ない時には一ペンスなんていうようなかけの損得を日記に記録しています。時には見事な勝ち方をしたなんてことをトク／＼として書いています。日本流に和訳しますと、マージャンで満貫をやったとか、今日ホールインワンをやったんだとかいうような事の記事を得意顔して書いております。

趣味の方はそれ位にいたしまして、今度はウッドフォード牧師の霊的、知的な方面はどうであったかということですが、この方面については英国国教会自体が惰眠をむさぼっていたのであります、あまり収穫はありません。もちろんウッドフォード氏の牧師としての職務の遂行振りに遺漏があつたわけではありませんが、それは日曜日の礼拝の司式、説教、それから洗礼、埋葬、結婚というような儀式を行うばかりでありまして、信仰とか教義についての何かの問題意識というものが、ウッドフォードの胸中にわだかまっていたというようなことは、一切日記の中から感じとれません。教会へ行つて説教をしたと書いてあるだけで、どういうことを説教したとか、自分の説教が正しかったんだらうかとか、そのようなことはいっさい書いてないのであります。また道德的な実践の問題に関して、自分の行動がはたして道德的に正しいものであったか

どうか。あるいは、何かの目標に向って、日々精進努力を重ねるといふようなことは、いつきこの牧師の日記からは読み取れません。そういうことを証するに足る記述は何ひとつありません。霊的関心ということについては、ほとんどゼロであったと言つてよいと思います。

せめてものこと、世俗的な読書はどうだったのだろうか。世俗的な読書の面に表われた知的関心の度合というものを知らうとしたのですが、この努力もあまり報われはしませんでした。こういう記事が出てまいります。「全然眠くなかったので、煖炉に火をつけ、椅子に坐つて、朝二時までフランスのルイ十四世の伝記を読んだ」八三年の三月のことであります。ひよつとするとこれは、一七五一年にヴォルテールが書いた『ルイ十四世の時代』という本の英訳かなとも思われます。それだとしますと、かなり有望なのですが、その次には、「今夜ロデリック・ランダムを読み終えた」という記事が出てきます。ロデリック・ランダムというのはスモレットという小説家の書きました股旅ものの小説でありまして、あまり知的水準の高くない作品であります。せいぜい日本の英文学者程度の読書範囲というふうにご承知願えればいいだろうと思います。「いろいろつまらぬ本等売って回わる夫婦者に、全部で五シリング九ペンスを支払った。ロビンソン・クルーソーニシリング六ペンス、バムフィールド・モア・カルー伝ニシリング、運勢大鑑九ペンス、笑つて太れ六ペンス」こういう記事になりますと、もはや絶望というのに近いといつてよいでしょう。『ロビンソン・クルーソー』は有名ではありますが、所詮これもやはり物語であ

ります。バムフィールド・モア・カルーというのは、デボンシヤの田舎の牧師の息子で、家出をして、ジプシーの仲間に入つて、その王様に選ばれたという人物でありまして、その伝記というのですから、これもそれほど知的な内容ではないようです。そして『運勢大鑑』さらに『笑つて太れ』に至りましては、もはや何をか言わんやであります。さらに日記の中から拾ひ集めた限りにおきまして、ウッドフォードの書物への投資総額は、全部を合計しましても、二ポンド三シリング九ペンスにすぎません。四十年間にであります。この金額はそう厳密に調査したわけでもありませんから正確ではありませんが、四十年の間のことです。たとえこの金額が十倍であつたとしても、四十年間の本の投資額としてはたいしたものではないと言へると思います。それでいて、ウッドフォード氏の日記のところどころに立派なギリシャ語、ラテン語の引用が顔を出しております。その教養の程度はけつして英国国教の牧師の体面を汚すものではなかつたようであります。また日記の最後に、彼が死にましてから、遺産管理人が行つた遺産評価の見積表が付録に載つており、その中で、ウッドフォードの蔵書は三十ポンドに評価されております。ですからかなりのものがその中にあつたに違いありません。しかし、日記で見る限りの彼の書物への投資額は、先に言つた通り、二ポンド三シリング九ペンスであります。しかもそれは『運勢大鑑』など年月が経つて評価出来るものではないわけです。といたしますと、評価三十ポンドの蔵書というのは、すべてこれはオクスフォードの学生と研究員時代に構築されたものであると推定せざるを

得ないわけにあります。要するにウッドフォードというのは、きわめて合理的な人物でありまして、年収三百ポンドの田舎牧師という、ひとつの職を得るためには、ある程度の学問勉強も必要ではあろうけれども、いったん、その職を得て終身の保証が成り立った上は、それ以上特別な榮進を望まない限りは、後は日々の生活をエンジョイしておればいいんであって、学問などという、妙なものに義理立てをする必要はない、そんなことはそこの偏屈者にやらせておけばよろしい、釣った魚にえさをやらねばならぬ筋合はないんだと、こういうふうに考えていたようであります。でありますから、毎日毎日まったく勉強なしで過ごしているように見えます。

ウッドフォードのこののんきな生活をもっともディスタープするものは、ほんの時たま、司教から舞い込んでくる特別説教の依頼であります。これは、われわれをときとして襲う学会での研究発表の要請と同じであります。

放蕩者の弟から金の無心の手紙がきたその翌日のこと、「今朝またもう一通不愉快な手紙が司教の事務室から届いた。来たる二月八日、日曜日の朝ノリッジの大聖堂で説教せよとのこと。」ウッドフォードはこの手紙に接して約二週間後、この司教のところへ文句を言いに行きます。どうしてもわたしがやらねばならないわけではないだろう、と。「わたしが司教のところへ出かけたのは、主として、大聖堂での説教がわたしに割り合てられた件についてである。」ところがさすがに司教ともなりますと、なかなか老獪な政治家でありまして、ウッドフォードは腕まくりをし

て、押しかけたものの、手もなく丸め込まれて帰って来たようであります。日記にはこう書いてあります。「司教は答えた。大聖堂の説教壇には、有能でちゃんとした寺祿を持った牧師を立てたいと思っている。だから自分としては、あなたに好意を示すつもりで人選をやっているのだ。」こう言われて返す言葉もなく、ウッドフォードは翌年の二月大聖堂の説教壇に立ちました。しかし、その時の経験は、ウッドフォードの心に、またもう一度という思いを起させるようなものではなかったようです。二年後の十二月にも同じ司教から、同じような依頼が届きます。「今日、食事中に肉屋の小僧がノリッジの司教からの手紙を持って来た。来年三月十九日、ノリッジのセントクレメント教会で、その慈善学校の基金募集のための説教をしてくれとのこと。これは気に入らない。」と、むきになって書いております。そして彼は今度は剣もほろろに拒絶の返事を書きました。そして以後は司教もこの種の依頼をして来なくなったようであります。

ウッドフォード氏の住んでおりましたウェストン・ロングビルという村は、一七八九年七月十四日のバスチーユの監獄襲撃事件のニュースが十日遅れで届くという程の田舎であります。七月二十四日にフランスで何やらえらい騒動があったらしいということを日記に書いております。そういう田舎でありまして、北海にほど近いところにあります。それでオランダからのジンの密輸が非常に盛んに行なわれておりました。ウッドフォードは牧師の身でありながら、この非合法の密輸の酒には大いにお世話になっております。例えば、一七八七年五月のこと、「月の光一樽を

ピン分けした」とあります。このムーンシャインというのは酒の銘柄ではありませんで、辞書を引きますと、密輸した酒のことをいうと書いてあります。今世紀になりまして、アメリカの禁酒法の時代に密造した酒のことをやはり、アメリカでもやはりムーンシャインと呼んでいたようであります。それから「鍛冶屋のジョン・バックに、一七九八年度の雑費として、二ポンド十四シリング十ペンス払う」という記事が出ております。牧師が鍛冶屋に雑費として三ポンド近い金を払うというのは理屈に合いません。何を隠しましょう、ジョン・バック、鍛冶屋というのは世を忍ぶ仮の姿で、本来は密輸業者であります。雑費というのは密輸入の酒の代金のことのようにあります。まあ、こういうふうにたいへんのどかな田舎で、実にのんびりとした暮らしを送っているのです。まあ、ウエストン・ロングビルもやはり、人間の住んでいるところでありまして、牧歌的な桃源郷ではなく、猥雑な人事に満ちあふれております。同僚の牧師がうかぬ顔をしているので、訳を聞いてみると、自分の家の召使いの間にゴタゴタが起つてというような話をしています。「彼のところの下男のジェームズ・アタトンが二人の女中、一人は昔私の家の女中をしていた二十三歳のリリー・グリーンブス、もう一人はメアリーと仲よくしすぎ、両方ともジェームズの種を宿している。前者リリーは昨日ジェームズと結婚したが、後者がや々と昨夜になってから、自分の身の上を打ち明けた。ジェームズはおまけにリリーの姉で、ウエストン・ハウスの女中を四年勤めているシューキーとも付き合っている。ジェームズは見かけは決してそんなやつとも見

えず、むしろ全くその反対と思えたのだが。」村のドン・ジュアンお粗末の一席であります。また、次のような記事が出て参ります。

「今朝、メアリー・パーカーなる娘の私生児に内々にジョンという名前をつけてやった。父親の名は聞き出せなかった。」トマス・ハーディという小説家がありますが、その有名な小説に「テス」というのがありまして、清純な乙女のテスというのが近所の地主の息子に、無理やり子供をはらまされまして、捨てられ、子供が生まれてまもなく、洗礼も受けないうちに死にかけるのでありますが、牧師さんに、せめて死ぬ前に洗礼を施して欲しいと言ったところ、そういう罪の子には洗礼は施せないと、剣もほろゝに断わられたという話が、この小説の中に出てくるのでありますが、さすがに密輸の酒を平気で飲む程良心が寛濶な牧師のウッドフォードは、テスの牧師のようにかた苦しいことは言わず、私生児にも洗礼を施したようであります。

十八世紀の昔にありましては、こういった父無し子の処置は、民生保護上の大問題でありました。これに対処するため、バスタディ・アクト、つまり庶出法という法律が定められておりました。この庶出法につきましては、また別の情報源があります。ウッドフォードより、もう少し前一七五〇年頃に、イギリスの南部、サリー州で小間物屋をやっていたトマス・ターナーという男が、教区の委員を勤めておりました。それが日記を書いております。その中で村で父無し子ができた時の始末にたいへん苦勞をするいろんなケースを書いております。要するに庶出法バスタデ

イ・アクトという法律によりますと、未婚にして妊娠中の女性が、治安判事のもとに出頭いたしました、自分の胎内の子供の父親の名前を証言いたしますと、その場合には治安判事は教区委員に命令いたします、その男の身柄を拘束してその女性と結婚するか、さもなくば生まれて来る子供の十四才までの養育費を責任を持って負担するという旨の、誓約書を提出して、それに見合う財産を担保に入れなければならないときめられてあります。

さてところで英国の国教会で結婚する場合に、結婚する前に三回、日曜日あるいは祝日に、牧師が来たる×月×日にAという男とBという女とが、この教会で結婚するけれども異議のある者は申し出よという事を、予告しなければならない事になっております。そしてまた、結婚式の最中にももう一回それを言うのであります。

シャーロット・ブロンテという女流小説家がおりました、たいへん有名な『ジェーン・エア』という小説を書いているのでありますが、ジェーン・エアという孤児の娘がミスター・ロチェスターというお屋敷の旦那様と、恋に落ち入って結婚しよういたします。そして結婚式の最中に牧師さんが、今からロチェスターとジェーン・エアの結婚式を取り行なうが、異議のある者は申し出よと、最後の予告をします。すると、一人の男がすくと立ち上って、「ロチェスターには、すでに正式の妻がいる」ということを宣言するので、その結婚式はぶちこわしという話があります。たいへんドラマチックな話なのであります。ターナーの日記の中にもこのしきたりに基いて、結

婚の予告を行ったところ、別の女から自分はこの花婿候補の子供を産み、結婚を約束してもらっているが、それをなかなか実行してくれないという訴えが出たという話が出ています。このために最初の結婚予告をしていた二人の縁組はダメになったのでありますが、そうしたところ、ダメになった花嫁の方が今度は治安判事のところへ、私のお腹の中には、あの男の子供がいるという事を申し出て、強制的にその男と結婚手続きを取らせるといふ、庶出法を逆手に取ったような結婚をしたことが書いてあります。つまり、教会の規定によらずに民事の法律で結婚をするようなことがあった訳です。要するに父親のない子供がおりますと、それは必然的に生活不能者となります。そうするとその養育は、村の人達が全部で金を出し合っている、プア・レイトといふ、救貧法に基づく救貧税といふ税金で面倒を見ることになり、そういう子供が増えることは、この税金がふえることになって、何とかこれを押さえないければならないわけです。しかしこの庶出法などという法律にもかかわらず、色男には金がないのが、洋の東西を問わぬ普遍的真理でありまして、こういう場合に保証金を積める男は少ないのであります。捕えてきても、たいがいは年端も行かぬ分別のつかない若い男の子というのが多いのであります。それで止むを得ず、結婚してその場のお茶を濁す、そしてしばらくすると、もう人生に嫌気がさして、兵隊か何かになって飛び出して行くということになります。光榮ある英国陸軍の人的資源の一部はかつてはこういうところにあったようですが、しかし結婚は男性としては何とか避けたいことであります。ウツ

ドフォード氏の日記の中にも、この強制結婚の司式をしたことが書いてあります。それには、「女は臨月近く、男は昨日の朝以来、教区役員により拘束中」と書いてあります。

こういうような結婚によつてでも、ともかく生まれて来る子供を合法化といいますが、嫡出に出来る女性はまだいいんでありますが、事情があつてのことでしょうが、男の名をいたがらぬ女性もたくさんおります。その場合は、女性の方から言つて来なくても、未婚で妊娠中であるということがわかりますと、教区委員はその女性を拘禁して、治安判事の前に連れて行き、相手の男性の名前を聞きただす権限を持つと庶出法では決められており、これもその女性にとっては大変なことであつたろうと思います。ともかく相手の名を隠して、いわゆる私生児を生み落しても、その女性の行く手には、まだまだ大きな、屈辱といえますか、罪ほろぼしが待っています。公開贖罪というものであります。ウッドフォードの日記の中に、こういう記事があります。「セアラ・ゴアなる女性が今朝、ウェルズの裁判所から令状を持つてたずねて来た。次の日曜日、ケアリリーの教会にて、子供を生んだことに對する公開贖罪しよくを行えという内容である。次の日曜日、礼拝後にこれを、公開で取り行わなければならない。」これは俗にスタンド・イン・ア・ホワイト・シートというものでありまして、贖罪を行う人間は白いシートを身にまといまして、教会の通路に立つて、贖罪文を読み上げなければならないことになっておりました。その贖罪文のサンブルも、日記本文への注釈として書いてありますので、ご参考のために日本文に訳してみますと、

こうなります。「全能の神の御前、信者会衆の前で、私はここに謹んで告白し、罪を認めます。私はだれだれといまわしい野合の罪を犯し、よってわが肉体を汚し、神様のご機嫌をはなはだしくそねました。この汚わしい罪を私は心から詫び、衷心より後悔しております。どうか神様、お慈悲とお許しを賜りますように……」

オールド・パーと申しますとウィスキーの銘柄がありますが、本物のオールド・パーは本名トマス・パーと申しまして、一四八三年から一六三五年まで百五十才程生きた人間といわれております。初婚が八十才、百二才で妻が死亡し、十年間男やもめを続け、再婚いたしました。百五十才の時にキャサリン・ミルトンという女性に子供を生ませ、その罪ほろぼしに白いシーツを着て、教会の通路に立ったということが記録に残っております。トマス・パーはもっと長生きしているはずだったのでありますが、それが一六三五年百五十才で死んだのは、第二代アランデル伯爵のせいでもあります。これはイギリスの骨董収集家の元祖と言われている人なのでありますが、何でもかでも古いものが好きで、シュロップシャーという北の方の田舎の領地へ行った時に、そこに住むパーが百五十才であることを聞いて、これを一度、時の王様、ジェームズ一世のお目にかけようと、ロンドンへ連れて行きました。田舎のきれいな空気と水の中でこそ保っていられたパーの生命は、ロンドンの汚い空気、汚い水で一辺にダメになりまして、すぐにロンドンで死んでしまったのであります。この時に王様がパーに、「お前、一体百五十才のその年迄生きて、ただ飯

を食っていたのではないか、何か人に誇れるような手柄を立てたことがあるか」と多少なめたような質問をしましたところ、パーは毅然、昂然と答えました。「俺は百五才でシーツを着て教会の廊下に立った。」と。

パーの話はウッドフォードの日記とは関係ありませんが、こういう生々しい人事消息を時たま交じえながら、四季の移り変りと共に、農作業のこと、二月十四日バレンタインの祝日には、教区の言葉がしゃべれる子供ひとりひとりに一ペニーづつ配るとか、十二月二十一日の聖トマスの祝日には、村の貧者に一シリング、クリスマスには村の身寄りのない老人達を牧師館に招いて晩飯を食べさせて一シリングの小使いを持たせて返す。こういうふうな定期的な行事が牧師の生活の中で暦のように決っております。そういったものに乗せられまして、ウッドフォードの生活は、来る日も来る日も、来る年も来る年も同じように繰り返されて行きます。その催眠的とも言えるほどに、坦々としたゆるやかな流れに、読者は誰しもほんとにイギリスの田園を流れる川を連想いたします。ただし、この川はどこへも流れ着かないのであります。単調な繰り返しかりであります。晩年の数年はとくに著しいものがあります。こういう生活に一番に音を上げますのは、読者ではなくて、ウッドフォードと同居しております姪のナンシーであります。ナンシーのことはこういうふう書いております。「ナンシーは最近、とても文句が多くなって、こんなたいくつな場所で暮らすことに不平を言っている」とか、「ナンシーのために、今日の午後、たびたび

落ち着かぬ気分になされた。私の家の陰気な状況について、不平を言っているのだ、見るものもなければ、たずねて行くところもほとんどないし、たずねて来る人もいないと言っている」とこういう記事が出ております。若い身空をこの牧師館に埋もれさせなければならなかったナンシー。これにまだ貧しかった頃のイギリスの女性の運命が読みとれます。おそらく、ウッドフォードの終生の面倒を見て、いささかの遺産をもらって、どうやらカツカツ一人で他人の世話にならずに生涯を終えることが出来る計算だったのだらうと思いますが、それにしても、ナンシーとしては、この嘆きは無理からぬものだったらうかと思えます。その単調さの原因は、この牧師館の自然的な環境ばかりにあるのではないようです。ウッドフォード自身の人柄も、大いに関係しているように思えます。いわば、非常にステイシックなと申しましょうか、こうと決めたこと以外のことは、何も考えられないというような性質の人、つまり静的でユーモアに欠けるところがあった人のように思えます。そのことの例をひとつ最後にあげまして、お話の締めくくりにしようかとも思いますが、ウッドフォードはある新聞に出たピストル自殺未遂事件の記事を読みまして、その記事を要約してこういうふうに書いているのであります。

「ブルース大尉なる人は、先週自分で自分の頭を撃った。しかし即死ではなかったので、剣の上に身をつつ伏したが、剣は身体にささって折れた。召使が部屋に入って行き、外科医を呼び、傷の手当てをして、床に寝かせた。そこで彼は大きなナイフを取って、死にそこなったわが身を

刺したが、これも折れた。傷は手当てされた。それで次にペンナイフを取ってのど笛をかき切り、それですぐに絶息した。」これだけを読みますと、果たして本当のことだろうか、とだれしも思っています。作り話だとすぐに分かります。自殺未遂のたびごとに、道具がピストルから刀、ナイフ、ペンナイフとだんだん小さくなって行つて、最小のペンナイフでついに目的が達成されるのです。作り話でないとしても、少なくともこの記事を書いた記者は、小嘶めいたブラックユーモアに気がつかなかつたわけがないのであります。ところがウッドフォードの日記の文章には、どこにもこのユーモアを感じ取った跡がないのです。すべてこれを事実ととっているようです。新聞に書いてあることは、すべて事実であると考える人のようであります。

ウッドフォードはこの文章にクスリともせずに、更に言葉を続けております。「彼が年収三千ポンドもある女性と結婚したのはそう昔のことではなく、この自殺の理由は何も言っていないそうだ。こういうのはほんとに陰気な話だ」と。わたしには陰気な話とは思えないのですが。ウッドフォードはまことに固定的な生活を送つた人であります。こういうふうな実に散文的と申すべき田舎の牧師がほんとに沢山いるのが、イギリスの国であります。それだけにかえてイギリスの国は、現実のことだけ考えていればいいんだというわけで、十八世紀の間、比較的に安定した進歩をつづけ得たのではないかというふうに思えるわけであります。